



Title	生産調整下の酪農経営と酪農民の課題
Author(s)	木村, 純
Citation	北海道大學教育學部紀要, 41, 29-43
Issue Date	1982-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29259
Type	departmental bulletin paper
File Information	41_P29-43.pdf



生産調整下の酪農経営と酪農民の課題

木 村 純

A Study on the Problem for Dairy Farmer and Dairy Farm Management under the Milk Control.

Makoto Kimura

目 次

1. はじめに	29
2. 根室地域における酪農経営の負債の増加と固定化の現状	32
3. 別海町 N 農協管内 K 地区の調査酪農家の経営展開	35
4. まとめ —— 生産調整下の酪農民の課題	41

1. はじめに

北海道酪農は、酪農「近代化」政策に沿って急速に拡大・発展した。ことに根釧酪農の大型機械化を基軸にした発展は著しい。しかし 1970 年代後半からの国内牛乳・乳製品市場の需給バランスのくずれを理由に、78 年以降は保証乳価が据え置かれ、翌 79 年からは過剰在庫による乳業資本の受乳削減を前提とする生産調整＝生産抑制が実施された。これらにより、酪農経営の実質収入が低下し、借入金に依存して経営展開をはかってきた根釧酪農の構造的危機が深まっている。

近年における酪農生産力は、大型トラクター機械体系の導入、高性能大型自走式収穫機械の共同利用、パイプラインミルクローバルクローラーの設置等を内実とする酪農機械化を中心に労働生産性の著しい上昇がみられた。一頭当り乳量や牧草反収と労働生産性との間には跛行的展開の様相がみられ、多頭化＝規模拡大が促進されたが、元来労働生産力の発展は投下労働時間の減少を基礎に酪農の多面的発展を条件づけ、農業労働力の配分と結合の自由度を高めるものである。離農の激発、労働力の流出は、必要な農業労働力の確保すら困難にし、酪農民の過重労働を生んだが、他方では今日の如き酪農機械化「一貫」体系段階に至る酪農生産力の発展の過程で機械・施設を中心とする生産組織の定着がみられる。今日では、地域酪農は、個別酪農経営を基盤としつつ、生産組織、農協、自治体の三重構造を形成し、その生産力も、部分的ながら地域的・集团的に形成している。

しかし、大型機械化の進展にもとづく農業生産力の発展が酪農の多面的発展に直ちに結びつかず、外国偽装乳製品輸入を含め、国内の農畜産物供給条件を極度に狭めたままでの、特定部門・地域での生産力発展・生産物供給量の増大は、「生産過剰」を結果させる。

今回の「牛乳過剰」の基本的原因は、このように乳製品の輸入増大とそれを助長させる畜産物価格安定法以来の酪農市場政策にあり、その根幹にふれることなしに、酪農家の責任のもとに需給調整を強行することは、酪農の発展にとって大きな阻害条件となり、酪農経営の困難性を惹起させる¹⁾。こうして生産調整に対応すべく、駄牛淘汰のみならず、乳牛売却、離農へと駆りたてる圧力が働きながら、他方では負債の重圧も相俟って規模拡大の困難もみられ、酪農の縮小生産すら懸念されている。

表-1 根室管内の酪農家の経済階層

農協		区分	戸数		乳牛		農家経済									
			割合 %	うち経産牛			農 業 収入 千円	うち生 乳販売 千円	うち個 体販売 千円	経営費 千円	約定償 還利息 千円	うち購 入飼料 費 千円	乳飼 比 %	農業所得 千円	所得 率 %	農外 収入 千円
				総 頭 数	頭 数	比率 %										
計	A	46.3	67.3	38.5	57.2	20,891	16,712	2,899	14,258	874	4,857	29.3	6,633	31.5	532	
	B	26.4	66.5	38.4	57.7	20,167	15,956	2,958	15,460	1,557	4,868	30.5	4,707	23.3	475	
	C	17.5	64.2	37.5	58.4	18,977	14,938	2,892	17,104	2,166	4,966	33.2	1,873	9.9	436	
	D	9.8	58.5	34.8	59.5	16,144	12,593	2,376	16,323	2,251	4,739	37.6	▲ 179	－ 1.1	376	
別海町	N	A	36.5	59.2	37.7	63.7	16,838	14,838	621	12,048	644	3,913	26.3	4,790	28.4	22
		B	37.8	55.7	36.4	65.4	16,799	13,815	1,165	12,977	1,020	4,027	29.1	3,822	22.8	83
		C	13.0	54.2	35.2	64.9	15,521	13,127	1,060	13,722	1,346	4,304	32.8	1,799	11.6	54
		D	12.7	52.1	34.5	66.2	15,751	11,245	2,127	15,473	1,235	4,650	41.4	278	1.8	29
	O	A	38.7	77.0	41.7	54.2	25,130	19,722	4,441	18,457	1,304	5,915	30.0	6,673	26.6	1,205
		B	32.0	77.7	42.0	54.1	23,674	18,325	3,886	19,483	2,331	5,919	32.3	4,191	17.7	1,150
		C	20.3	74.1	40.6	54.7	22,001	17,156	3,565	20,853	2,578	6,169	36.0	1,148	5.2	1,085
		D	9.0	72.6	41.3	56.9	19,792	16,235	2,749	21,792	2,819	6,182	38.1	▲ 2,000	－10.1	1,157
	P	A	35.8	83.7	45.5	54.4	26,206	19,817	3,508	16,012	842	5,624	28.4	10,194	38.9	152
		B	25.0	78.8	43.3	54.9	23,955	18,385	3,635	16,070	1,523	5,216	28.4	7,885	32.9	75
		C	21.9	74.4	42.2	56.7	22,143	16,843	3,402	16,905	2,182	5,381	31.9	5,238	23.7	91
		D	17.3	62.2	35.2	56.6	16,793	13,333	2,148	15,394	2,646	4,309	32.3	1,399	8.3	165
	Q	A	40.8	66.8	42.6	63.8	20,945	18,806	2,127	15,468	603	5,828	31.0	5,477	26.1	1,197
		B	18.5	62.0	41.1	66.3	20,872	17,628	3,244	17,476	1,408	5,941	33.7	3,396	16.3	1,314
		C	26.8	57.9	38.7	66.8	19,530	15,987	3,525	8,314	1,994	5,870	36.7	1,396	7.1	1,002
		D	14.0	54.8	35.1	64.1	17,082	13,664	3,287	18,053	1,720	6,270	45.9	▲ 971	－ 5.7	1,006
その他の根室内	V	A	68.6	66.2	38.9	58.8	21,082	17,069	3,660	14,041	614	5,613	32.9	7,041	33.4	1,054
		B	17.2	61.6	35.8	58.1	18,787	15,270	3,109	14,032	967	4,916	32.2	4,755	25.3	819
		C	14.2	53.4	35.1	65.7	16,230	12,975	2,476	14,053	1,225	4,342	33.5	2,177	13.4	705
		D	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	W	A	49.5	61.2	35.6	58.2	18,053	15,061	2,757	12,736	1,057	3,829	25.4	5,317	29.5	915
		B	31.4	68.2	38.6	56.6	20,016	15,924	3,871	15,775	1,805	4,549	28.6	4,241	21.2	983
		C	11.8	64.9	34.6	53.9	18,131	13,750	3,389	16,556	2,461	4,351	31.6	1,575	8.7	979
		D	7.3	66.1	36.6	55.4	16,040	12,432	3,094	16,340	2,245	4,300	34.6	▲ 300	－ 1.9	997
	X	A	70.4	62.0	33.8	54.5	19,503	14,719	2,667	13,255	968	4,324	29.4	6,248	32.0	55
		B	20.7	60.1	33.8	56.2	18,410	14,126	2,779	14,617	1,637	4,526	32.0	3,793	20.6	58
		C	5.6	58.8	32.2	54.8	17,166	12,882	3,025	15,293	2,163	3,757	29.2	1,873	10.9	59
		D	3.3	68.5	39.0	56.9	19,285	15,002	3,265	20,968	2,560	6,341	42.3	▲ 1,683	－ 8.7	69
	Y	A	26.5	63.6	35.6	56.0	19,019	15,073	3,092	13,689	1,088	4,577	30.4	5,336	28.1	0
		B	23.8	65.4	35.0	53.5	19,363	15,294	3,248	15,410	1,909	5,120	33.5	3,953	20.4	49
		C	35.4	59.6	33.0	55.4	16,362	13,105	2,409	14,870	2,837	4,169	31.8	1,492	9.1	—
		D	14.3	41.0	25.8	62.9	9,902	7,756	1,534	11,114	2,556	3,153	40.7	▲ 1,212	－12.2	—
Z	A	58.8	40.3	24.8	61.5	12,073	10,342	1,731	7,960	963	1,743	16.9	4,113	34.1	370	
	B	41.2	32.0	19.6	61.3	8,389	6,910	1,479	6,445	1,031	1,415	20.5	1,944	23.2	827	
	C	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	D	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

注1. 根室支庁が管内の農協を通じて行った「酪農経営実態調査」結果を組み替えて作表。

2. 乳量については、生乳販売額を各農協毎の1980年度の1戸当り乳代+補給金単価(実績)で除した。

別經濟收入と借入金残高（1980年）

収 支 (1980年営農年度)								借入金残高 (1980年 営農年度末)				生乳販売額と乳量			
農外支出	農家所得	家計費	余 剰 (償還財源)	償 還 元 金			差 引	計					経産牛1頭当り 生乳販売額 千円	1戸当りの乳量 (推計) 1000kg	経産牛1頭当りの乳量 (推計) kg
				制資	度金	系統その他 その資金			計	計	制資	度金			
千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円		
573	6,622	2,752	3,870	759	895	1,654	2,216	21,939	15,695	6,245	28.5	434	191.2	4,965	
787	4,395	2,808	1,587	1,310	1,900	3,210	▲1,623	36,609	24,946	11,623	31.7	416	182.5	4,755	
992	1,317	2,845	▲1,528	1,570	1,747	3,317	▲4,275	49,377	30,440	18,937	38.4	398	170.9	4,657	
1,298	▲ 1,101	2,814	▲3,915	1,501	1,640	3,141	▲7,056	51,767	29,785	21,982	42.5	362	144.1	4,139	
—	4,812	2,794	2,018	570	442	1,012	1,006	15,590	13,709	1,881	12.1	394	170.5	4,523	
18	3,887	2,561	1,326	928	1,813	2,741	▲1,415	26,069	20,615	5,454	20.9	378	158.6	4,356	
—	1,853	2,451	▲ 598	1,053	1,392	2,445	▲3,043	34,218	25,403	8,815	25.8	373	150.7	4,280	
—	307	2,904	▲2,597	1,204	1,681	2,885	▲5,482	31,685	22,446	9,239	29.2	326	129.1	3,741	
285	7,593	3,049	4,544	1,371	723	2,094	2,450	40,199	26,310	13,889	34.6	473	224.2	5,376	
358	4,983	3,019	1,964	2,338	1,996	4,333	▲2,370	65,619	40,411	25,207	38.4	436	208.3	4,960	
455	1,778	3,047	▲1,269	2,325	1,244	3,568	▲4,837	71,312	46,434	24,878	34.9	423	195.0	4,803	
448	▲ 1,291	3,158	▲4,449	2,312	1,015	3,227	▲7,676	89,935	48,551	41,384	46.0	393	184.6	4,469	
3,147	7,199	2,853	4,346	736	745	1,481	2,862	28,057	13,707	14,350	51.1	436	228.5	5,022	
3,859	4,101	2,699	1,402	1,192	1,761	2,953	▲1,551	37,275	21,795	15,479	41.5	425	212.0	4,896	
3,751	1,578	2,549	▲ 971	1,452	1,778	3,230	▲4,202	52,598	27,212	25,386	48.2	399	194.2	4,601	
3,509	▲ 1,945	2,656	▲4,601	1,600	1,642	3,242	▲7,844	59,502	30,478	29,024	48.8	379	153.7	4,367	
—	6,674	2,363	4,311	244	1,105	1,349	2,962	16,007	10,945	5,062	31.6	441	215.5	5,059	
—	4,710	2,505	2,205	440	4,307	4,747	▲2,543	26,957	14,084	12,873	47.8	429	202.0	4,915	
—	2,398	2,789	▲ 391	948	5,140	6,087	▲6,659	37,550	19,889	17,661	47.0	413	183.2	4,734	
—	35	2,562	▲2,527	1,387	3,915	5,303	▲7,828	34,634	17,817	16,816	48.6	389	156.6	4,461	
28	8,067	2,566	5,501	799	1,606	2,405	3,096	15,247	11,748	3,499	22.9	439	193.6	4,976	
—	5,574	3,023	2,551	1,401	2,482	3,883	▲1,332	26,121	18,835	7,286	27.9	427	173.2	4,837	
108	2,774	3,043	▲ 269	1,858	1,470	3,328	▲3,597	31,867	23,526	8,341	26.2	370	147.2	4,192	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
—	6,232	2,986	3,246	739	1,250	1,989	1,257	19,187	15,657	3,530	18.4	423	172.3	4,841	
48	5,176	3,332	1,844	1,351	2,393	3,747	▲1,899	34,603	26,103	8,500	24.6	412	182.2	4,720	
—	2,554	3,620	▲1,066	1,298	1,830	3,128	▲4,194	47,111	30,171	16,940	36.0	397	157.3	4,547	
15	1,282	3,241	▲1,959	1,240	1,541	2,331	▲7,019	44,044	27,326	16,718	38.0	340	142.3	3,887	
159	6,144	2,732	3,412	696	633	1,309	2,103	19,116	17,333	1,783	9.3	435	167.6	4,958	
124	3,727	2,665	1,062	958	1,000	1,958	▲ 896	28,241	24,542	3,698	13.1	418	160.8	4,758	
74	1,858	2,807	▲ 949	775	731	1,506	▲2,456	37,129	28,299	8,831	23.8	400	146.7	4,555	
1,169	▲ 2,783	3,126	▲5,909	871	959	1,829	▲7,739	51,359	35,693	15,666	30.5	385	170.8	4,380	
16	5,320	2,640	2,680	916	425	1,340	1,281	30,580	16,444	14,136	46.2	423	172.8	4,854	
57	3,945	2,874	1,071	1,631	796	2,427	▲1,356	42,481	27,138	15,343	36.1	437	175.3	5,009	
75	1,467	2,962	▲1,495	1,984	584	2,568	▲4,063	57,896	36,168	21,728	37.5	397	150.2	4,553	
—	▲ 1,212	2,631	▲3,843	1,533	556	2,089	▲5,933	46,399	31,423	14,975	32.3	301	88.9	3,446	
—	4,483	1,965	2,518	828	234	1,062	1,456	22,614	22,029	585	2.6	417	119.0	4,798	
—	2,771	1,709	1,062	934	973	1,907	▲ 845	22,544	21,889	655	2.9	353	79.5	4,056	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

本稿では、このような条件下での根室地域における酪農経営と負債の実態を明らかにし、酪農経営の課題を検討する。

注 1. 今回の「生産過剰」に至る酪農政策の展開の特徴については、山田定市「酪農政策の点検と進路」(桜井 豊(総括執筆)他『80年代の日本酪農』, 酪農事情社, 1981年2月)を参照のこと。山田論文では、これまでの酪農政策が、「日本の酪農を本格的に定着, 発展させるという基調にたらず, 輸入依存の構造を放置したまま酪農『近代化』を推進してきたのであった。そのような政策の中では, 高生産性大規模酪農家が一応生産力の担い手として措置されているかのごとくであるが, ごく少数のこれらの上層農家群に依拠するだけでは, 日本の酪農を自立的に発展させるに足る担い手を層厚く形成されることは困難であり, さらにこれらの上層農家じたい, 経営的な危機を深めている」(同書 156 頁)と述べている。現下の「生産過剰」—生産調整はこのような酪農政策の本質的理解を前提にして, その性格が把握されるべきものである。

2. 根室地域における酪農経営の負債の増加と固定化の現状

根室支庁は, 管内の農協を通じて 1980 年の酪農経営実態調査を行った。管内 2,153 戸の酪農経営の収支状況を階層別に分類したもので, A 階層は総収入から経営費, 家計費, 元金償還額を差し引きなお余剰金のある経営(償還可能型), B 階層は利息支払いはできるが, 元金の返済は一部しかできない経営(元金償還可能型), C 階層は家計費を賄えば利息の一部しか負担できない経営(元金償還不能型), D 階層は, 利息と元金はおろか家計費も賄えないかあるいは農業所得が赤字になり, 経営破綻に陥っているとみられる経営(利息支払い不能型ないし農業所得赤字型)である。表-1によれば, 根室管内全体では A 階層は 46.3%, B 階層は 26.4%だが, C 階層は 17.5%, さらに D 階層は 9.8%にのぼっている¹⁾。

こうしてすでにかかなりの酪農経営が負債の増大, 固定化の泥沼に陥っていることがうかがわれる。これは借入金残高の多寡が経営収支の良否と対象的であることに端的に示されている。A 階層の 2,194 万円に対し, D 階層は 5,177 万円に及んでおり, 2 倍以上の開きがある。さらに借入金のうち, 長期・低利の制度資金の割合が A B C D の順に低下しており, 逆に D 階層や C 階層では, 短期・高利の農協プロパー資金の占める割合が多くなっている。

注目されるのは, 乳牛頭数規模とこの A B C D の経済階層との間には必ずしも明白な関連がみられないことである。管内全体では平均乳牛頭数は A B C D の順に多いが, いずれの階層でも 30 頭を上回っており, その差はあまり顕著なものではない。しかも W 農協や X 農協のように A 階層よりもむしろ D 階層の平均頭数が多い地域もみられるのである。この点は後に N 農協について詳しく検討することにする。

農業所得は当然ながら A B C D 各階層の差が著しいが, 農業粗収益については農業所得ほどの明白な差はみられない。つまり所得率の違いが著しく, A 階層では 30%を上回っているのに対して, B 階層は 23.3%, C 階層では 10%を下回り, D 階層では農業経営費が農業粗収益を上回っている。これはひとつに不安定な階層ほど借入金が多く, しかもそのなかで短期, 高利の農協プロパー資金の比率が高いために利息支払い分が多いことにもよっているが, 直接経費についても D 階層や C 階層で多くなっているのである。それは乳飼比が D C B A の順に多いことに示されており, 不安定な階層ほど購入飼料代をはじめとする生産経費の支出が多くなっているのである。生乳販売額と経産牛頭数, 各農協ごとの実質乳価によって 1 頭当り乳量を推計すると, A B C D の順に多い。購入飼料費の傾向と併せ考えると, 飼料供給方法など乳牛の飼養管理能力の階層間格差の存在をうかがわせる。

次に注目すべきことは, A B C D の各階層の比率が, 同じ根室地区でも農協ごとに異なっ

ていることである。例えば、Y 農協では、C 階層・D 階層を合わせると 50 % 近くを占め、地区平均を大きく上回っている。また P 農協、Q 農協の如くこれら 2 つの階層が 40 % にのぼるのに対し、X 農協や V 農協のように A 階層が 70 % 前後を占める地域や、さらに Z 農協のように D 階層や C 階層に該当する酪農経営が全く存在しない地域もみられる。

借入金が A B C D の順に少ないことは、各農協にほぼ共通しているが、D 階層や C 階層の経営収支の悪い酪農経営が多い農協ほど、A B C D の全階層に渡って借入金が多く、しかも農協プロパー資金の割合が高いという傾向がある。このことは、農協を主導にした地域酪農の展開のありかたが、各経済階層の分布の度合に大きな影響を与えていることをうかがわせるものである。

次に、A B C D のそれぞれの階層に属する酪農経営がどのような特徴をもっているかを別海町 N 農協について検討しよう。

N 農協が管内とする別海町 N 地域は、表－1 でも明らかなように根室のなかでは 1 戸当り平均の乳牛頭数、出荷乳量が少なく、したがって中小規模の酪農経営が相対的に多い地域である。酪農の基盤整備は、集中的な政策資金の投下を受けた根釧パイロットファームや新酪農村をもつ別海町のなかではやや立遅れており、そのことと関連して 1 戸当りの借入金も少なく、農協プロパー資金への依存度も少ない。したがって酪農地帯、ことに根室地域で負債の増大、固定化が進行しているなかで、農協経営の状態は相対的に安定しているともいえる。1 戸当りの土地面積は、別海のなかでは多いが永年草地が多く、粗放的な土地利用が行なわれている。1 頭当りの乳量、乳飼比が低い、それは粗放的な土地利用に派生する粗飼料供給技術の相対的おくれにももづくもので、酪農経済の採算性を改善する余地がその面にも残されている。

表－2 のように、N 農協ではすでに 30 頭以上の経営が 4 分の 3 を占め、A・B 階層では 80 % 前後、C・D 階層でも 60 % 近くに達する。A 階層では 40 頭ないし 50 頭以上層が 40 % を上回り、B・C 階層では 33 % 台、D 階層では 37 % 弱である。最も多い頭数規模は A・B 階層では 30 頭以上層であるのにたいして、C・D 階層が 20 頭以上層である。経営収支のよい経済階層により規模の大きい酪農経営が多いという階層性は否定できないが、D・C 階層にも 40 頭ないし 50 頭以上の大型経営が存在すること、逆に A 階層にも 20 頭以上層ないし 20 頭未満の中小規模の酪農経営があることは注目される。

頭数規模別に A B C D の各階層の比率をみると、20 頭未満層と 20 頭以上層では C 階層と D 階層を合わせると 40 % を超える。しかし 20 頭未満層でも A 階層が最も多い。30 頭以上層では、C・D 階層の比率は 16.5 % である。20 頭以上層と 30 頭以上層では B 階層が最も多いのであるが、N 農協では最も平均的な規模である 30 頭以上層に、経営収支の悪化がより深刻な C 階層、D 階層が少ない。40 頭以上層、50 頭以上層では A 階層がそれぞれ 39.7 %、43.5 % を占めているが C・D 階層を合わせた比率は 30 頭以上層よりも規模が大きくなるほど増加する。

したがってやや誇張した言い方になるが、最も平均的な頭数規模の経営よりも、小規模経営や大規模経営の間での安定的な経営と経営破綻に陥っている経営の分極化がより顕著に進行しているのである。

例えば、20 頭未満層についてみると、A 階層の経営の特徴は、農業収入こそ 500 万円に達しないが、借入金が 120 万円弱しかなく、しかもプロパー資金の借入が皆無で負債圧が少ないこと。また 1 頭当りの乳量は低い、購入飼料費が少なく、したがって直接経費も少ないことから所得率がきわめて高く、200 万円以上の所得を実現していることである。他方、同じ頭

数規模の D 階層は、農業収入は 1,900 万円に近く、粗収益自体は 30 頭以上の A 階層をも凌ぐが、生乳販売よりも個体販売による収入が多く、購入飼料費が膨大で 50 頭規模の酪農経営に匹敵する。借入金も 2,000 万円を超え、農協プロパー資金の割合も大きい。利息返済が 100 万円以上になり、農業所得の赤字も 230 万円以上に達する。牡犢育成など、搾乳から個体販売へと重点を移す経営展開の失敗による負債の増大、経営破綻と考えられる。

50 頭以上層では、A 階層は農業収入が 2,500 万円以上で粗収益の点では B・C・D 階層と大差ない。しかし B・C・D 階層の借入金が 3,000 万円ないし 4,000 万円以上であるのに対して、A 階層では 2,400 万円であり、制度資金の割合が高く、利息返済額は相対的に少ない。乳飼比が 27.3 % と低く、所得率が 25 % 強で農業所得は 600 万円以上あり、償還財源は 300 万円以上ある。1980 年に返済すべき元金は 100 万円台で、B・C・D 階層が 300 万円台であることと較べれば、きわめて少ない。一方同じ 50 頭以上層の D 階層は農業収入では A 階層とほぼ同じ 2,500 万円強であるが、借入金残高が 4,000 万円を超えており、しかも農協プロパー資金の比率が高いので利息償還だけで 150 万円に近い。乳飼比も高く、所得率がきわめて低い。この層だけが家計費支出が 400 万円以上あるが、それを充たすと 350 万円以上の不足が生じ、償還元金 400 万円弱と合わせて、差引 750 万円のマイナスが出る。C 階層についても経営費では同様の傾向が認められるが、農家所得が 200 万円を超え、家計費支払後の不足が 110

表-2 別海町 N 農協の乳牛頭数規模別の経済階層の経営概況

経産牛頭数規模	戸数割合 %	階層区分	階層別戸数割合 %	乳牛			農家			経済収				
				総頭数	うち経産牛		農業収入			経営費	約利 定償 還息	購入 飼料費	乳飼 比	農業所得
					頭数	比率 %	総額 千円	うち生乳 販売収入 千円	うち販 売収入 千円					
20頭未満	5.0	A	31.3	21	12	58.1	4,961	4,315	17	2,744	56	891	20.6	2,217
		B	25.0	25	16	64.6	5,604	4,634	32	4,186	411	1,014	21.9	1,418
		C	18.8	25	13	52.0	5,971	4,132	977	5,304	979	887	21.4	667
		D	25.0	25	12	48.0	18,816	4,902	8,887	21,130	1,152	7,280	148.5	▲2,314
20～29歳	20.7	A	25.4	38	24	69.0	11,029	9,219	536	7,037	390	2,208	24.0	3,992
		B	34.3	41	25	61.0	12,245	9,587	1,260	9,268	747	2,819	29.4	2,977
		C	20.9	38	26	68.4	12,001	9,976	1,000	10,600	1,217	3,044	30.5	1,401
		D	19.4	39	25	64.1	11,500	8,298	1,926	10,667	802	3,285	39.6	833
30～39頭	37.5	A	38.8	53	34	63.4	14,946	13,298	485	10,546	568	3,442	25.9	4,400
		B	44.6	51	34	66.9	16,090	13,006	1,179	12,217	1,086	3,628	27.8	3,873
		C	9.1	54	34	63.0	13,569	12,586	879	12,740	1,301	4,312	34.3	829
		D	7.4	51	34	66.7	14,155	11,459	234	13,634	1,513	3,599	31.3	521
40～49頭	22.6	A	39.7	68	42	60.9	19,603	17,347	711	14,340	721	4,691	27.0	5,263
		B	35.6	66	43	65.2	19,448	17,137	1,017	10,195	1,127	5,111	29.8	3,253
		C	11.0	67	43	64.1	18,242	16,601	31	16,112	1,454	5,010	30.2	2,130
		D	13.7	60	42	70.0	16,696	13,409	1,588	16,497	1,463	4,702	35.1	199
50頭以上	14.2	A	43.5	89	58	65.4	25,380	22,545	1,031	19,020	1,084	6,194	27.3	6,360
		B	32.6	86	56	65.1	22,582	19,688	1,522	18,167	1,175	6,437	32.7	4,415
		C	17.4	91	60	65.9	26,108	21,334	2,942	23,829	1,771	8,729	46.9	2,279
		D	10.9	95	62	65.3	25,336	19,268	1,726	24,650	1,469	7,684	39.9	686

注 1. N 農協「酪農経営実態調査」結果より集計

2. 乳量については、生乳販売額を N 農協の 1980 年度の 1 戸当り乳代+補給金単価(実績)で除した。

万円で、借入金残高が4,800万円余に達し、これはD階層よりもむしろ多いが、制度資金の占める割合が多いので、差引400万円のマイナスにとどまっている。

注1. 表-1・2はそれぞれの農協が組舞台帳などをもとに整理したものである。したがって農協を経由しない収支は計上されておらず、酪農経営の実態を全面的に把握したものではない。とくに実際のズレが大きいと考えられるのは、家畜商の介入する部分が大きい個体販売収入と、支出では家計費である。これらは総じて、実態はもっと多いものと推測される

3. 別海町 N 農協管内 K 地区の調査酪農家の経営展開

このような激しい階層分化、負債の増加・固定化は、今日の酪農経営が置かれたどのような条件によっているか、N農協管内で実施した酪農経営実態調査を中心に検討しよう。

N農協は、別海町N地域の三つの農協が合併して現在の規模となった。表-3によれば、1973～75年のいわゆる「酪農危機」の状況を脱し、76年から78年にかけては、円高による交易条件の好転も働いて、所得率が30%台で推移していた。しかし保証乳価、限度数量の据え置きが続くなかで、経営費は増大したが、収入増が伴わず所得率が20%台に低下した。とくに80年代になってからの落ち込みは著しく、所得率が20%になるとともに、年度末の組合員勘定は90%以上の組合員農家で赤字になっている。

注目すべきことは、1976年から1980年までの5年間に借入金が1,200万円から2,400万円へと2倍に増加していることである。これは、1976年の第3次酪農近代化計画の規模拡大路

支 (1980 年 営 農 年 度)									借 入 金			乳 量	
所 得 率	農 外 収 入	農 外 支 出	農 家 所 得	家 計 費	余 (償 還 財 源 剩)	償 還 元 金	う ち 制 度 資 金	差 引	借 入 金 残 高	う ち 制 度 資 金	比 率	1 販 戸 売 当 り 量	1 乳 (経 産 牛) 頭 当 り 量
%	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	%	トン	kg
44.7	0.6	0	2,218	1,908	310	86	42	224	1,186	0	100.0	49.5	4,127
25.3	0.5	0	1,419	903	516	1,353	275	▲837	9,700	7,450	76.8	53.2	3,324
11.2	0	0	667	1,064	▲397	1,135	674	▲1,532	16,370	10,684	65.3	47.4	3,648
-12.3	0	0	▲2,314	1,529	▲3,843	3,095	1,643	▲6,938	21,283	14,043	66.0	56.3	4,688
36.2	47.1	0	4,039	2,305	1,734	895	519	839	9,245	7,402	80.1	105.8	4,409
24.3	109	0	3,088	2,123	965	1,954	514	▲989	18,059	14,302	79.2	110.0	4,401
11.7	161	0	1,562	2,098	▲536	2,342	1,188	▲2,878	30,678	21,341	70.7	114.5	4,404
7.2	0	0	833	2,489	▲1,656	1,585	870	▲3,241	22,299	17,086	76.6	95.2	3,809
29.4	14.6	0	4,415	2,596	1,819	1,022	506	797	14,403	12,269	85.2	152.6	4,489
24.1	134	30	3,977	2,513	1,464	3,088	1,120	▲1,624	28,657	21,953	76.6	150.0	4,411
6.1	0	0	829	2,567	▲1,798	1,433	840	▲3,171	32,790	26,305	80.3	144.6	4,249
3.7	0	0	521	3,266	▲2,745	3,191	1,148	▲5,936	38,259	26,957	70.5	131.5	3,868
26.8	48	0	5,311	3,256	2,055	985	624	1,070	18,164	16,151	88.9	199.1	4,740
16.7	15	31	3,237	3,017	220	2,642	908	▲2,422	27,429	28,226	75.0	196.7	4,574
11.7	0	0	2,130	2,732	▲602	3,537	1,015	▲4,139	38,628	29,814	77.2	190.5	4,431
1.2	120	0	199	2,992	▲2,793	4,169	1,050	▲6,962	37,549	26,954	71.8	153.9	3,664
25.1	48.1	0	6,408	3,244	3,164	1,367	819	1,797	23,897	22,286	93.3	258.8	4,461
19.6	16	0	4,431	3,057	1,374	3,233	1,080	▲1,859	31,041	25,053	80.7	226.0	4,035
8.7	0	0	2,279	3,379	▲1,100	3,147	1,368	▲4,247	48,144	36,667	72.0	244.9	4,081
2.7	0	0	686	4,254	▲3,568	3,979	2,321	▲7,547	40,855	25,968	63.6	221.1	3,567

線に沿った機械・施設・土地投資によるものが大きい。別海町では1975年から「新酪農村」への移転が始まり、周辺の地域一円で第2次構造改善事業が進展した。N農協管内でも、バルククーラーの導入、それを契機として、パイプラインミルクカー、給餌や清掃などの機械を装備した大型牛舎の建設、交換分合にもとづく圃場の集団化等がこの期間に目覚しくすすんだ。

われわれは、1981年の秋にN農協管内K地区の11戸の酪農経営の実態調査を行った。K地区は別海町のなかでは、第2次構造改善事業を最も遅く実施し、1977年から開始している。この地区は、第1次構造改善事業を1963年に行ったが、その失敗などにより、負債が累積して開拓農協の経営が危機に陥るといなかで、「借入金に依存した規模拡大は危険」という反省が地域的合意に達し、開拓農協を中心に自己蓄積を主軸にした緩やかな規模拡大がすすめられてきた。根釧一円で第2次構造改善事業が実施され、経営の大型化が進展するという条件下で、1976年にこの地区の開拓農協は、N農協に事実上吸収合併された。その後制度資金の導入が積極化した¹⁾。表-4は、調査実施酪農家の経営収支と階層区分で、家族構成と土地所有については表-5に示した。11戸のうち、A階層5戸、B

表-3 N農協組合員1戸当り資金状況(各年度末)および農家経済分析指標

(単位:千円)

	1976年	1977年	1978年	1979年	1980年
組合員戸数	370	359	354	353	350
借入金 合計(A)	12,145	14,909	17,056	21,043	24,231
貯 金 合計(B)	3,011	3,723	4,783	5,033	5,421
差引純負債(A-B)	9,134	11,186	12,273	16,010	18,810
借残農家率(赤)	55.1	55.4	54.0	67.7	90.9
貸残農家率(黒)	37.0	38.2	39.5	25.5	2.3
農 業 収 入 ①	8,389	10,901	12,707	13,808	13,881
経 営 費 ②	5,697	7,208	8,398	9,826	11,005
農業所得③=①-②	2,692	3,693	4,309	3,982	2,776
農家余剰③-家計費	1,245	1,923	2,269	1,834	756
所得率③÷①	32.1	33.8	33.9	28.8	20.0
乳 飼 費	31.2	32.9	31.5	35.7	38.5

注1. N農協事業報告書、事業計画書(各年版)より引用、算出。

2. 借入金には組借借残も含む。また貯金には組借貸残も含む。

3. 乳飼比は、飼料購買額を生乳販売高で除した。

表-4 N農協管内K地区における実態調査実施酪農家の経営収支

農家 番号	乳 量 (1980年 1~12月)	乳 牛 頭 数				経 済 収 支								貸 金 返 済	組 勘 収 支	借入金残高		区 分
		搾乳牛	総頭数	牛乳販売	個体販売	粗収入	経営費	(うち飼料)	(うち支払利息)	所得	所得率	乳飼比	制資金			計		
1	256 ^t	39 (6,564.1)	74	22,478	3,897	26,375	16,275	7,47	1,280	10,100	38.3	33.1	千円 707	黒字 222,418	千円 19,959	千円 20,459	A	
2	230 ^t	35 (6,571.4)	80	17,541	2,600	20,141	13,922	5,572	1,015	6,219	30.8	31.8	1,707	黒字 672,019	32,281	39,053	B	
3	186 ^t	33 (5,636.4)	73	15,692	—	15,692	12,834	4,150	1,237	2,858	18.2	26.4	444	黒字 77,473	34,185	40,545	C	
4	170 ^t	31 (5,483.4)	60	13,410	—	13,410	12,339	4,379	998	1,071	8.0	32.7	904	黒字 428,687	28,084	38,743	C	
5	156.3 ^t	26 (6,011.5)	55	13,278	1,505	14,783	10,759	3,723	734	4,024	27.2	28.0	1,272	赤字 ▲958,094	10,051	14,677	B	
6	149 ^t	23 (6,478.2)	38	12,914	118	13,032	10,081	5,244	150	2,951	22.6	40.6	77	赤字 ▲733,014	13,052	13,785	D	
7	140 ^t	24 (5,833.3)	43	12,525	77	12,602	8,251	4,582	78	4,351	34.5	36.6	130	黒字 1,268,632	2,598	2,658	A	
8	138 ^t	24 (5,750.0)	43	12,123	—	12,123	6,336	2,507	2	5,787	47.7	20.7	46	黒字 521,933	0	0	A	
9	109 ^t	24 (4,541.7)	49	9,492	—	9,492	7,835	2,550	1,040	1,657	17.4	26.9	684	黒字 175,612	18,470	18,530	A	
18	908 ^t	19 (4,778.9)	29	7,618	—	7,618	6,465	1,841	616	1,153	15.1	24.2	615	黒字 201,164	11,835	17,907	B	
11	66.9 ^t	15 (4,460.0)	27	6,014	84	6,098	4,102	1,228	9	1,996	32.7	20.4	50	黒字 416,377	0	0	A	

注1. N農協「組合員勘定報告書」より物成、ただし乳量については聞取による。

2. 区分は西春別農協による経済階層区分。

3. 乳量の()は搾乳牛1頭当りの乳量。

階層3戸、C階層2戸、D階層1戸である。
この地区では中・小規模の酪農家に経営収支の状態が良いものが多かった。

これらの農家の負債の増加と固定化の要因を明らかにするために、土地、機械、施設への投資過程とそのための資金の導入状況を示したのが表-6と表-7である。2つの表によって投資過程とA B C D階層の区分との関連を検討すると、次のような点が指摘される。

搾乳牛30頭以上の経営は4戸あるが、そのうち①と②は、1976年までに30頭に達し、牧草地40haに達し、80年までには、パイプラインミルクカーとバーンクリーナーを設置した大型牛舎を建て、50頭の飼養を可能にする資本装備をほぼ完了している。一方③と④は、30頭に達したのがごく最近であり、①・②とほぼ同じレベルの機械・施設投資を77年～79年に行い、頭数拡大や土地拡大に先行させている。それだけに③と④は76年以降の経営条件の好転の時期の自己蓄積を充分になしえないうちに、借入金に依存した資本投下を行った。その結果として借入金残高は4,000万円に近い。①・②は家族労働力の優位性を生かしながら、大型経営を実現してきた酪農家であり、1頭当り乳量も高い。しかし②が構造改善資金の借入によって77年～78年に牛舎の建築、79年にトラクターを導入しているのにたいして、①は、79年に構造改善資金により、牛舎への投資を行っているが、①のように全くの更新、新築ではなく、従来の牛舎へのつぎ足しであった。81年のトラクターについても中古を自己資金で購入している。こうした投資への態度の違いが借入金残高の違いとして結果し、負債圧の相違が経済階層の別につながったものと考えられる。それは表-8の「生産調整」下の今後の規模拡大についての考え方にも反映しており、「生産調整」自体には反対しながら、楽観的見通しをもつ①にたいし、②はさらに規

表-5 調査酪農家の家族構成と土地

農家番号	家 族 構 成		土 地 (ha)				
	農 業 従 事	非農業従事	総面積	採草地	採草放牧地	放牧地	飼料作物
①	経営主(43) 妻 (41)	母 (69) 長男(12) 2男(10) 長女(15)	54	12	15	10	
②	経営主(53) 妻 (50) 長 男(26) 長 女(22)		60	28.3	—	25	
③	経営主(56) 妻 (44) 長 男(28) 長男の妻(27)	長男の長男(1)	48	26	7	4	6.5
④	経営主(55) 妻 (50) 長 男(29)		45	11	9	13.5	3.5
⑤	経営主(55) 妻 (52) 2 男(28) 2男の妻	2男の長男(0)	50	25	7	10	2
⑥	経営主(56) 妻 (53) 長 女(25)	長男(20) (札幌で 在学)	28	—	7	4	9 (デント)
⑦	経営主(55) 妻 (42)		23.5	15	7		
⑧	経営主(45) 妻 (35)	長男(13) 2男(11)	28.5	5	13	7.7	
⑨	経営主(51) 妻 (48) 長 男(24)		38.5	23	7	6	0.5 (かぶ)
⑩	経営主(女56) 長 男(29) 長男の妻(24)		27	11	3	10	2 (デント)
⑪	経営主(49) 妻 (47)	長女(24)	24.2	17		6	

注 聞取調査による。

表-6 調査酪農家の規模拡大過程

農家番号	1969	1970	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81
1	土地30 乳牛20 65年 バケツミルカー	5ha 草地改良 サイロ 牛舎(238m ²) 尿溜 ハイエレベーター		トラクター モア デットレーキ	チョップバー(1/2) プロード キャスター	乳牛30 チョップバー	牛舎(1138m ²) 尿溜	乳牛30 収納庫 プロード キャスター	バルククーラー バーンクリーナー ロードワゴン ブラウ		交換分合 牛舎(1132m ²) バイブライ ミルカー	収納庫	トラクター(79p.s.)
2	69 第1次機改で トラクターの導入	乳牛20 土地40 乳牛30	サイロ						牛舎(594m ²) バリククー コーンハーベスター	牛舎(1198m ²) 交換分合 サイロ トラクター		トラクター ロールバーラー	
3	65年 バケツミルカー	離農跡地 8ha購入	原野4ha 草地造成		乳牛20 トラクター(32p.s.) プロードキャスター レーキ、デッタ	6.6ha 牛舎(132m ²) 尿溜 トラクター(62p.s.) プロードキャスター チョップバー ワゴン		離農跡地 3ha購入 原野1.5ha 草地造成 モア バルクスラー ペラー	モアコン プロード キャスター		交換分合 10ha購入 (移転) 牛舎(499.3m ²) バイブライ サイロ・尿溜 ミルカー バーンクリーナー		
4			乳牛20		土地30	原野0.5ha 草地造成			牛舎(132m ²) バルククーラー バーンクリーナー バイブライミルカー		収納庫 ロールバーラー	トラクター(79p.s.) コーンハーベスター	
5	66, 67年離農跡地 11ha購入 64年 バケツミルカー		乳牛20	草地造成5ha と10地5ha売却 牛舎(236m ²) サイロ	5ha 購入 牛舎(79.2m ²) トラクター(68p.s.) モア・レーキ デッタ	土地30	2.6ha 草地造成 1.8ha 草地造成	コーンハーベスター(1/2) バルククーラー					
6					乳牛20				牛舎の改築 バルククーラー バーンクリーナー			トラクター(63p.s.) ロードワゴン モア デッタ・レーキ	
7		サイロ		原野1.5ha 草地造成	乳牛20			牛舎増築 バルククーラー バーンクリーナー			交換分合2.5ha 草地造成		
8		サイロ トラクター(22p.s.) モア・レーキ デッタ プロードキャスター	乳牛20		サイロ トラクター(55p.s.) モア ロードワゴン		バーンキヤリア ブラウ バルククーラー				トラクター ロールバーラー	牛舎(1330m ²) 離農跡地 バーンクリーナー バイブライミルカー	
9		原野2.7ha 草地造成		離農跡地 10ha購入			原野0.5ha 草地造成	ブラウ モア プロードキャスター	乳牛20 牛舎(1165m ²) バルククーラー バイブライミルカー トラクター	土地30 サイロ モア デッタ		トラクター ロードワゴン	
10		尿溜		離農跡地 3ha購入 草地改良				トラクター モア フロントローダー	牛舎(198m ²) バルククーラー モア デッタ	トラクター ローラー プランター ハーベスター		ハロー	
11		草地改良 1.5ha		土地3ha 購入	と10地5ha売却	トラクター			バルククーラー プロードキャスター		収納庫(198m ²)		

注1. 農家への聞取によって作成

2. 乳牛20 土地30 は成牛20頭、牧草地30haへの到達を示す。

表-7 調査酪農家の投資過程（制度資金の導入過程）

（金額の単位：万円）

	1968年以前	1969年	1970年	1971年	1972年	1973年	1974年	1975年	1976年	1977年	1978年	1979年	1980年	累計
1		農18.9 自32.3	開82.9	畑280	畑218	土7			未25	農250	構160 住公・持家 年住800	(土19) (構200)	(農30) (土59)	2,182.1
2		農45.1 自88.4 畑250 構44.6	開171.8	土16.2 自130 構166.2						農76.4 土50 構600	(土62.5) (構300)	(構871) 経150	住190	3,566.6
3	1968年 農 23		開69.8	土18.9	土10.3		畑358	農105 畑96	農126	土18.4		(農530) (総1639) 経500	(土48) 住450	3,992.4
4		農50 自95.8 畑250	開181.8	自120		自154		畑350	畑100	農250 土24.6 (土5.6) 構496		住公450	(構108) (長217.9)	3,803.4
5	1966年 農 15 1959～68年自60 1967 畑 200		開160.9		土8.8	土48 畑300	畑100		土8	農241	経350			1,540.0
6		農19.4 自6.3 畑394.7	開183.0	土7.4						構160		(土39) (構540)	(土40)	1,389.4
7		農14.1 自81.3	開139.1			土20.1								254.6
8														0
9	1967年 畑 163	自96.2	開157.5		土4.8	土9.5	土10 自187	土27	土21.5 過75	土31.2 構600	(構264)	(土11)	(土8)	2,076.4
10		自13.8	開104.5	土8.9 自95		農62 土25.8	土11.2		土8.5	土52.2 構520 長40	(土13)	(土41)	(土17) (経350) (長270)	1,632.9
11			開40.4		土5.7									46.1

注1. 西春別農協借入金台帳より作成

2. () は1980年度はまだ償還が据置かれているもの

3. 農：農地取得資金，土：土地改良資金，未：未墾地取得資金，自：自作農維持資金，畑：畑作営農改善資金，開：開拓承継資金，過：過疎経営資金，構：構造改善推進資金，経：農家経済資金，総：総合施設資金，長：長期貸付，住公：住宅公庫，持家：持家住宅資金，年住：年金住宅資金

模拡大したいと考えている。負債の返済のために現在よりも出荷乳量を増やしたいとしているのは、[3]・[4]についても同様である。

20 頭以上 30 頭未満の経営は 5 戸で、A 階層に区分されるのは [7]・[8]・[9] である。[7]は飼料生産のためのトラクターの機械体系を一切導入しておらず、サイレージとして使用する牧草の栽培から収穫までの機械作業の全てを委託しており、詰め込みだけを家族労働力で行っている。乾草はほとんど購入によっており、乳飼比の高さはそのためである。土地拡大もほとんど行わず、牛舎の拡大もつぎ足しですすめてきた。こうして借入金が少なく、安定した経営を維持してきたが、後継者の就農がまだ確定していない。30 頭の搾乳牛を飼養するためには、施設、土地投資も必要となり、「自分で機械をもたなければやりきれない」段階を迎えている。

乳価が据え置かれるなかで「自家生産で個体改良に努める」としながらも、「このままではじりじり追いつめられてゆく」と感じている。[8]は借入金残高がゼロである。分家入植という相対的に有利な初発条件を生かしながら、兄弟間の共同作業等を部分的に位置づけながら、自己資金によるゆるやかな規模拡大を図ってきた。今日まで土地拡大をほとんどせずには到達することができた。こうした安定的な経営展開を可能にしたのは、「拡大のための投資はしたくない」として、頭数拡大を先行させ、家族労働力が不足になった段階で機械・施設へ投資するという経営展開の序列を貫いてきたからである。1981 年には自己資金（総額 1,500 万円）で牛舎の大型化、施設装備を行ったが、これも「不況なので、建設費が安い」のを利用したものであり、優れた経営管理能力が発揮されている。しかも、その牛舎の建設が多頭化に直結せず（借入金に依存しないために可能になった）、「44 頭搾れるが、夫婦 2 人では 30 頭ぐらい。現在中学生の子どもが搾りたいと思ったらできるようにすることがねらい」としているように、家族労働力の再生産が世代交代をも含む長期的な過程として展望されていることは注目される。

[6]は D 階層に区分される。最近までは [7]と同様トラクター機械体系による作業は一切委託しており、乾草は現在でも全て購入しているが、長女が後継者に決まったことに伴い、1980 年「婿を迎えられるように」「生産調整で不安だったが、利用料も高くなったのでトラクターを導入して、一貫作業ができる」ようにしている。現在のところ 80 年に借りた構造改善資金の返済が始まっていないので負債による影響は少ない。むしろ乾草代を含む購入飼料費が膨張し

表一 8 調査酪農家の今後の経営についての考え方

[1]	生産調整自体には反対だが、(根拠酪農全体が)今まで背のびしてきたことがあるから、ここで一服するのめよい。少しぐらい波風がたっても乳量の多い年と少ない年はある。
[2]	今すぐ 250 トンは搾りたい。現在の土地・施設の面からみて搾乳牛 65 頭、350 トンぐらいは搾りたい。
[3]	(構造改善による交換分合の機会に移転、牛舎、サイロを新築) 早く 250 トンぐらい搾りたい。
[4]	来年は 200 トンを搾りたい。乳価据置で赤字ではなかったが、借金を予定どおり返せない。
[5]	投資を控えれば、生産調整自体はそんなに厳しいものではない。
[6]	娘にムコをむかえられるように、生産調整で不安だったが、(トラクターの利用料も高くなったので)トラクターを導入、一貫作業ができるようにする。拡大する予定はなかったが、機械を入れるのは予定どおり。今後は、土地の基盤整備が課題になる。
[7]	現状で経営を続けていくのが一番風当たりが少ない。30ha 以上になると自分で機械をもたなければやりきれない。自家生産で個体改良をつとめていくが、このままではじりじり追いつめられてゆく不安がある。
[8]	今年、牛舎を建築(不況なので建設費が安い)自己資金で延べ払い)44 頭搾れるが、夫婦 2 人では 30 頭ぐらい、(現在中学生の子どもが搾りたいと思ったらできるようにすることがねらい)拡大のための投資はしない。
[9]	1977 年に投資をしたときは、搾乳牛を 40 頭ぐらい搾るつもりでいたので、もう少し搾りたいが、生産調整で、自分のペースで搾れないということはない。乳価が据置かれていることがより深刻である。
[10]	娘に後継の意志がないので、娘が中学生の時に借金して規模拡大することは止めた。自分たちの老後にも、また娘にも借金は残したくない。

注 聞取調査による。

て、所得率を低下させていることや、札幌で大学に在学中の長男への仕送り分など家計費の負担が大きいことによるものと思われる。土地拡大も遅れていることから「生産調整」のもとで乳価の据え置きがさらに続けば、経営の悪化は一層すすむ可能性がある。

20頭未満の2戸のうち、⑩はB階層、⑪はA階層に区分されている。⑩は所得率があまり高くない。表-3によれば⑩は土地改良資金をほとんど毎年のように借入しているが、牧草地の表土を芝生として販売し、その後の回復策としての投資である。土地生産力の維持・向上に重点を置くものではなく、きわめて窮迫的なものであった。この経営は1977年に構造改善資金520万円を借入れて牛舎を建てた。この牛舎は25頭の搾乳牛を収容することができるが、1980年までにはこの頭数には達していない。加えて1980年にはさらに農家経済資金など620万円の新規投資を行っており、今後の経営展開にとって不安要因となっている。

⑪は後継者を確保していない経営である。1973年に自己資金でトラクターを導入して以降、バルククーラの設置と乾草用収納庫の建設をいずれも自己資金で実施しているが、規模拡大のための投資はまったく行っていない。これは、「娘（長女—小学校用務員）に後継の意志がないので、娘が中学生の時に借金して規模拡大することは止めにした。自分たちの老後にも、また娘にも借金は残したくない」という考え方にもとづいている。

注1. この地区の酪農展開の特徴、農協合併の経過については、美土路達雄・山田定市・木村 純『酪農生産力の現段階と酪農家の主体形成』（北海道大学教育学部産業教育計画研究施設報告書第18号、1980年3月）第4章「酪農における農民層分解の現段階」（木村稿）、第5章「泉川における地域酪農の展開と酪農家の実践」（同）を参照のこと。

4. まとめ——生産調整下の酪農家の課題

以上の検討を通じて、酪農経営の展開と経営収支の良否（A B C Dの階層区分）との関連については次のようなことを指摘することができる。

根釧、ことにその中核をなす別海町では、1975年から新酪農村への入植が開始され、2次構の実施と相俟って、周辺の酪農経営においても、新酪農村の資本・技術装備を一つのモデルとした投資が積極的に行われた。それは平均飼養頭数が30頭を上回るなかで、搾乳牛50頭レベルの経営の条件を整えようとするものであった。こうして1970年代の後半には負債額が3,000万円を超え、5,000万円に達するような経営が簇生した。それは当然にも76～78年の経営条件の一定の好転のもとで、経営費の年々の上昇に見合う保証乳価の引き上げが行なわれることや負債償還の計画に照応する拡大再生産を順調にすすめることが期待されていたものであった。しかし生産調整が実施され、乳価が据え置かれるなかで、予期した生産の拡大が図りえず、負債圧と直接経費の上昇により経営収支が悪化したのである。73～75年の「酪農危機」の時期に増加した借入金もこれらの経営にとっては死重として働いたものと考えられる。

K地区の酪農家の場合、このような規模拡大のための投資の積極化は、農協合併と第2次構造改善事業の実施を契機としたものであり、③や④はこのタイプであり、②もこれに近い。

⑥、⑨、⑩は同様の背景で、20頭段階の経営から40頭段階に相当する機械・施設投資を行いながらまだその規模に到達していない経営である。

これらの酪農家の75年以降の投資は、けっして冒険的なものではなく、根釧一円で一層の経営の大型化（その典型としての新酪農村入植）の進展下で、後継者の基幹労働力としての就農—結婚という家族労働力の条件変化を踏まえたものであった。また負債の増加も、それを契機とする住宅の新增築などにも起因している。このような酪農家で経営の破綻がみられるこ

とこそ、まさに小農生産において生産調整を強行することの危険性を示すものである。

一方、経営収支の状態が良い①や⑧の場合、「規模拡大のための投資はしない」という考え方が経営展開のなかで貫かれ、搾乳、育成牛・牡犢販売を組み合わせながら自己蓄積を図り、家畜労働力の不足が明らかになった時点で省力化を目的とする機械・施設への投資を行ってきた。土地取得を相対的に有利な条件で先行させたことを基礎に、このような投資序列が貫かれた。また機械化の過程で、フォレージハーベスターの共同所有・共同作業が位置づけられ、個別所有・個別利用を一辺倒としない機械導入が行なわれてきた。さらに①が複式簿記を記張していることにみられるような優れた経営管理能力の存在も不可欠の条件となっていた。

①・⑧は中・上層酪農経営のA階層の一端を示しているが、小規模の②にみられるようにA階層の全てが発展的であるわけではない。搾乳牛が20頭に達しない②は、後継者が確保されていないので、経営主夫婦が高齢化することによって、経営の縮小・離農に向かう可能性が強い。しかし、酪農「近代化」政策のもとで画一的な経営の大型化が進行するなかで、経営が破綻する大型酪農家が現れる一方で今日の酪農生産力の水準に立脚してこのような小・中規模の酪農経営の存立が可能となっていることは重要である。

今日の事態の根本的な解決のためには、輸入乳製品の抑制や牛乳・乳製品の価格体系の確立を含む酪農政策の転換が求められている。負債の累積・固定化を招いたのも、今までの酪農政策が、高生産性大規模酪農家を一応の生産力の担い手と指定しつつ、画一的な技術・資本装備を個別経営の条件を無視したかたちでおしすすめてきたことにもとづいている。

このような酪農政策の根本的転換を目ざしながら、酪農民による経営の改善も当面の重要な課題である。負債については、負債整理資金などを活用して償還をすすめながら、生産の直接経費を低減させることが、個別経営のみならず地域酪農の課題として追求されるべきである。その際の具体的な課題としては、第1に、1頭当り産乳量の増大、第2に、自給飼料の低コスト生産にもとづく飼料給与方法の改善、第3に、過剰投資の軽減などがあげられる。

従来、1頭当り産乳量の増加には人工授精制度、家畜共済組合など農民の共同組織が重要な役割を担い、いわば集団的な追求が基礎になっていた。しかし今日の時点においても、酪農家ごとに飼料給与方法が違い、それにもとづいて産乳量にも差異が生じ、経営収支の良否につながっている。個々の酪農家で蓄積した優れた飼養管理方法を、その科学的意義を研究者や専門労働者の協力で明らかにしながら、交流・普及することが求められている¹⁾。

産乳量の増大はまた飼料生産の問題とも密接に関連している。それは、アメリカからの飼料穀物の輸入拡大を前提にして、購入飼料の多給によって実現しようとする方向と、地域の条件に適した飼料作物の開発も含めて、経営内ないし地域内の飼料自給を最大限に追求し、それに照応する高泌乳牛の改良をすすめる方向とが存在するからである。後者の道をとるためにはやはり研究者、専門労働者との広範な共同が必須の条件となる。

同時に、このような方向を歩むためにも、飼料給与方法の改善の前提となる良質の自給飼料を生産するための土地基盤整備をすすめる必要がある。これを個別酪農経営の負債増につながらない方向で実現することが重要である。

産乳量の増大、飼料給与方法の改善を促進するためには新しい技術の導入が不可欠となり、土地基盤整備の進展と併行してすすめられなければならない。今日の時点では負債整理対策がまず重要であるが、一面的な規模拡大路線に終止符をうつためには、こうした経営展開を可能にする資金対策、行政的事業が必要である。厳しい市場条件のもとで負債累積の不安が酪農民

に大きくなっている時だけに重要である。

同時に元利償還を順調にすすめる長期的な経営の計画をたてうる経営管理能力の形成について、簿記記帳などの習得が課題となっている。そのために農協など農業指導機関の役割が重要になっているとともに、酪農の生産、経営の課題と結びついた公的社会教育の展開が期待される。

注 1) このような内容での酪農民の学習の一端については、木村 純「酪農生産力の発展と酪農民の教育課題」(北海道大学『教育学部紀要』第 38 号, 1981 年 3 月) 参照のこと